

# ブルーベリーの無加温ハウス栽培

福島県農業総合センター 会津地域研究所

## 1 部門名

果樹・小果類・品種、環境調節

## 2 担当者

斎藤祐一・増子俊明・野上紀恵・勝又治男・永山宏一

## 3 要旨

会津地方におけるグリーンツーリズムの振興に対応して、長期間の誘客を可能とする収穫期幅拡大のために、7年生の北部ハイブッシュ系ブルーベリー1品種、南部ハイブッシュ系ブルーベリー5品種を用いて、無加温ハウス栽培について検討した。

- (1) ハウス区は、2月19日～9月10日まで0.1mm厚ビニールフィルムで被覆(3月2日～4月10日までは0.05mm厚ビニールフィルムによる内張を設置)した。2月19日～5月20日は気温25℃以上でハウスサイドを自動開放し、それ以降は常時開放とした。
- (2) ハウス区は、被覆後からの気温が高めに推移したことにより、開花期が1ヶ月程度早まり、収穫盛が5～31日早まった。シャープブルー、オニール等の早生品種では6月上旬からの収穫が可能であった。
- (3) ハウス区は、収穫時の降雨が遮断されることにより、落果および裂果が減少し商品率が高まった。一粒重は小さくなるが、RM示度が高まり、食味および果実品質の向上がみられた。食味はハウス区のシャープブルーおよびマグノリアが優れた。
- (4) ハウス区は、樹冠の拡大が早いものの収量が低い傾向であった。ハウス区で最も収量の多いシャープブルーでは、4年間の累積収量は5,840g(対露地比84.7%)であった。また、ハウス区のアーリーブルーでは樹勢の衰弱が認められたが、これはほ場の土性が粘質であり物理性が生育に影響したと考えられた。
- (5) 以上の結果から、2月中下旬からの無加温ハウス栽培により、シャープブルーを中心としてオニール等の早生品種を導入することにより、6月上旬から品質の高いブルーベリーを収穫できると考えられた。

表1 無加温ハウス栽培における開花期および収穫期

品種	収穫期 (月日)		落果 率 (%)	商品 率 (%)	裂果 率 (%)	一粒 重 (g)	RM 示度	酸含 量 (%)	収量 (g/樹)	累積 収量 (g/樹)
	始	盛	(%)	(%)	(%)	(g)		(%)	(g/樹)	
<b>ハウス</b>										
アーリーブルー	5/22	6/1	1.4	100.0	0.0	0.74	17.8	0.36	339	739
オニール	5/30	6/7	1.5	100.0	0.0	1.48	15.8	0.17	1,776	3,889
ケープフェア	6/2	7/1	1.3	100.0	0.0	0.95	14.4	0.44	1,380	3,917
シャープブルー	6/8	6/26	2.0	100.0	0.0	1.39	15.9	0.33	3,246	5,840
マグノリア	6/7	6/20	3.3	100.0	0.0	1.56	16.1	0.56	1,002	4,716
サンシャインブルー	6/30	7/16	1.3	99.6	0.0	1.20	14.8	0.48	1,251	5,257
<b>露地</b>										
アーリーブルー	6/20	6/28	1.5	96.4	0.0	0.98	14.8	0.30	1,203	6,067
オニール	6/29	7/8	3.7	91.5	7.6	2.00	11.8	0.21	3,867	11,216
ケープフェア	6/29	7/6	3.3	97.6	0.8	1.50	11.8	0.36	2,277	8,288
シャープブルー	7/9	7/19	6.7	96.4	2.0	1.71	14.2	0.29	1,835	6,894
マグノリア	7/15	7/20	3.4	99.3	0.0	1.92	12.2	0.63	2,028	7,568
サンシャインブルー	7/16	7/28	2.5	78.1	0.0	1.25	12.0	0.45	1,674	6,433

収穫期は始;10%収穫した日、盛;50%収穫した日、終;90%収穫した日とした。

落果率 = 落果果実重 / (収量 + 落果果実重)

商品率 = 正品収量 / 収量

裂果率 = 裂果果実重 / 収量

酸は1/10N NaOHで滴定し、クエン酸に換算した。

累積収量:4～7年生時の収量を合計した。

(本試験は、条件は一部異なるが結実初期から4年間実施している。)

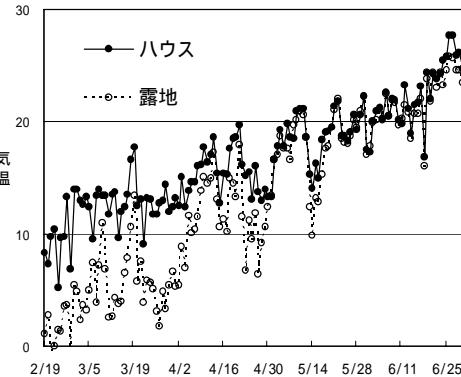


図1 平均気温の推移

## 4 主な参考文献・資料

- (1) 平成18～21年度福島県農業総合センター試験成績概要(2006～2009)